
I S Insincere・story ~ふざけたオリ主の転生録~

見ろ！作者(主に頭)がゴミのようだ！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS Insincere・story 〴〵ふざけたオリ主の
転生録〴〵

【Nコード】

N4393BA

【作者名】

見ろ！作者（主に頭）がゴミのようだ！！

【あらすじ】

テンプレチート転生者？いやいやいらないよ、俺は今を生きるのが楽しいんだ。ゆっくりまったりふざけて生きるのがね。えっ？意見なんて聞いてない？いや、聞けって

ちよっ、おま、うわなにをするやめ

アッー！！！！

「テンプレチート転生？フッフ、フハハハハハ！我が世の春が来て」うるさ

あらずじに書いたようにテンプレ（笑）チートwwwwww転生者（爆）
ものです。えっ？ちよつと違う？

……ハハハ、ナニヲイツテイルカワカラナイヨ。

そんな駄文なので原作を持ってないと表現が足りなくてわからない
場所が多々あります。お気をつけ下さい。あと、感想とかで誹謗、
中傷とか書くと泣き目を見ることになりますよ？（俺が）

そんなわけで駄文ですがそれでもよいと言っならよろしく願いい
たします
ではどーぞ

「テンプレチート転生？フッフ、フハハハハハ！我が世の春が来て」うるさ
こんな夢を見た。

今日もいつもと同じように朝起きて、いつもと同じように
登校し、いつもと同じように友人と駄弁り、いつもと同じように楽
しんでいた。

「と」

そして漫画にあるような、小説にあるような、B級の映画だろうが、
日曜の朝にでもやっている、特撮のような非日常は 当然ない。

「て すか」

そんな日常に満足していた俺は、

「あゝ、一度でも良いからラノベの事件とかに巻き込まれてみたい
よな」。お前もそう思うだろ？」

と言った友人と、

「そんなわけ無いだろ。それに俺はこうやって皆で楽しめてるだけ
で十分だよ」「まあ、お前の場合かな。もうちょいその楽しみ寄
越してくれたっていいじゃんかよ」などと会話し、いつものよう
に歩き出した。

………思えばこの会話がフ……いや、何でもない、気にしないでく
れ。

「　　いい　　に　　さい　　！」

ちなみに俺は何処にでもいるようなありふれた高校二年生で、ぶっちゃけ顔は平均より下だと思う。

彼女も今まで出来た事がないし、告白した事も、された事もないから何時もリア充爆発しねーかなーなんて考えているどうしようもなくありふれた非リア充の一人だ。

……まあ、ウチの学校は色々とおかしいんだけど…それはまた今度でいいだろう。

で、結局友人と別れて何時も通りの一日を終え

「いい加減起きろツツてんだろオがツ！！」

スッパアアアアアアン！！

「がアツツツ！！」

　　る事もなく勢いよく振り抜かれたハリセンの音と共に俺は盛大に舌を噛んだ。

「~~~~~！！！」

うん、もう現実逃避は止めようか。だって現実に御坂○琴みたいなやつがハリセンを持つてるのを見たら頭疑われるよ？しかもこの目に悪くない程度に真っ白くて何もなし、全くどこのテンプレだよ。黄色い救急車来るよ？自分で自分を疑わないとやってなんないんだよ……

「やっと起きた？アンタ火事の中でも起きなさそうね。それより、この偉大なる創造神様に選ばれたのよ？感謝の言葉でも述べたらどう？」

意味わかんねえ……

何こいつ……いい加減にどっか行ってくれよ……

「アンタ言つに事かいてどっか行けですって！？そもそも私は

」

え？何？状況が把握できない？
じゃあ回想スタート

「ちよつと、聞いて

」

友人と放課後歩き出して もとい帰り出してからしばらくたち、
会話が途切れた頃にそれは起こった。

（うわ、あれ危ないだろ……）

俺が見たのは小学生にもなっていないような少女が道路の真ん中を歩いている光景。ご丁寧に後ろからスピード違反的な速度で2メートルがやって来ている。

これはまずいと一瞬で判断した。勿論俺は見知らぬ少女のために命を投げるような聖人君子でも、紳士でも、ましてやお人好しでもない。ただの高校生だ。まあそりゃ子供がトラックに轢かれるのなんか見たくはないが命まで張ろうとは思わない……何がまずいかと言うと

「テンプレ来た！！これで勝つる！！」

このよく分からんテンションの友人だ。そのまま幼女に駆けて行き優しく(?)歩道まで突飛ばした。そして不様に転んでいる。

「クソッ！まともに走る事もできないくせにッ！」

今度は見知らぬ少女はともかく、流石に親しい友人まで亡くしたくないので、俺は走り出した。そしてその勢いで友人を蹴り飛ばし、罵倒を浴びせながらトラックを待ち勢いよく

伏せてトラックの下をくぐり抜けた

テンプレかと思ったか、ハッ、甘いわ！！

そんなわけで周りの拍手やらなんやらを受け流しながら俺と友人は帰った

え？ふざけんな、テンプレはどうしたって？

いや、テンプレではないんだよ、困った事に。

まあ焦るなって、続きはまだあるんだ。

じゃありスタート

その後俺は一人暮らしの家に帰ったんだ。高校になってから親が二人共同じ場所に単身赴任っていう謎の状況が生まれてね。そして炬

燧でぬくぬくと一人で蜜柑を食べて居たんだ。

「 見ーっけ 」

そんな声が頭に響いた途端、

「 ツ！？ 」

蜜柑が喉に詰まり、

ガシャン！

飲み物をこぼし、

ドタッ！

水道に向かう途中で転けて、

ガンッ！

タンスの角に思い切り頭をぶつけ、

ゴロゴロッバタッ！

階段から転げ落ちて意識が朦朧としたところで蜜柑のせいで窒息死。

……………笑えよ、笑えばいいじゃないか…

いまわの際にそんな事を考えていたらあのよくわからない空間にいたのさ…

「うん？こは…？俺はさっき、ひどい目に会った気がする」

そこで何かをこらえるような声が聞こえたので振り返って見ると、

「ぶくく、アンタ、私を、笑いで、こ、殺す気？」何かよう分からん御○美琴がいた

「
で？結局俺は何に選ばれたんだ、創造神サマよ？」

「アンタ、面白かったから書類の寿命をちょちょっと変えて私に会いに来るようにしたのよ」

What? 寿命? 誰の?

「勿論アンタの」

面白かった? 何が?

「アンタの生活の色々なところが。そうね、特にアンタがよくやってた『悪戯』かしらね」

まさか……見られてたのか？

「その気になれば何でもできるモンよ。なんたって神だし？人の思考を見抜くなんて朝飯前、ましてや気になった奴の生活を見るなんて呼吸するようにできるわ」

あれ？確かに俺あんまし喋ってないな……

「で、結局何なんだよ、たかが悪戯小僧一人に会うために連れてきたんじゃ無いだろ？要件はなん「会うためよ？」……は？」

「だから会うためだって」

は？こいつ頭大丈「聞こえてるわよ」………チッ……

「……か創造神（笑）がこんなやつで」「……燃やしてやるうかしら、刻んでやるうかしら、潰してやるうかし」「どうなさったのでございましょうか、我らが崇める創造神殿」フン、まあいいわ」

危ない危ない。考えるのにも自重が必要だな……

「けど、たかが『悪戯』と言ってもアンタのは桁が五つか六つ違うわよ？　あれ傑作だったわね。確か、浮田、とか言ってたっけ？

あの教師、アンタのおかげで病院送りよ？……檻の付いた……」

……あれはあいつが悪い。確か小学生の頃だったか……あいつは口リコンだって噂が流れてたんだ……いやいやいや、たったそれだけで人壊す程俺は下衆じゃねーよ！？……その噂が気になった俺はちよつとした隠しカメラであいつを追ってたんだが……まあ、噂みたいな屑だったんだよ。……おかしいとは思ってたんだ。授業後はすぐ消えるし、大体小学生がそこまでタチの悪い噂を流すはずがない……

まあそれは　　よくないが　　流すとして、それを見た俺は少しばかりキレて『悪戯』をし始めたんだ。…まあたったそれだけだよ、うん、それだ「まず手始めに教師の下駄箱を超強力な電磁力にして開かないようにして足止め、家に先回りしてセンサーの前を通ったら何度でも家具が倒れるようにナノサイズの機械を家にばらまき、二日かけてその家だけが揺れるように、外から見てもわからない地震を発生させる装置を開発、設置。靴を超反発素材を使った偽物の嫌がらせ仕様（極疲労バージョン：一歩歩くとその度に足裏に力が反発して返ってくる）にして学校のデスクに　　」

「わ、わかったからやめてくれよ！」

「何よまだ七%よ？」

「もういい…」

そんな感じで一切証拠を残さずに色々やったんだけど…まあいいよね？相手はロリコンだし

「よく言うわ、『みんなが気に入らない教師だから』で今もやっていくせに　　」

1時間経過

「さて、創造神サマ？もう帰っていいよね？」

「そうね、結構楽しめたし。帰りたいの？」

帰りたいのって…

「そりゃそうだよ、あの家にももう十七年近く住んでる。いきなり拉致されたんだし、それに蜜柑、まだ食べ終わってないしね。ハハハ…。それにあんたなら帰れないなんて言わないだろ？」

「まあそうね、あんたが死んだことはなかった事にすればいいし。うーん、けどなあ、一度神に関わった人間はもう二度とその神と直接関われないんだよね…」

「そつか、じゃああんたとはこれで最後か。もう人殺したりなんかすんなよ？じゃあな」

「ところでアンタ、『悪戯』好きみたいだけど、された事ってあるの？」

あれ？なんだこれ…

「いや、された事はない。まあ俺は良くも悪くも注目されないみたいだな」

ッ！？口が勝手に！？

確かに俺は注目されないが…

何か嫌な予感がする……俺はそういうのはあまり信じない派なんだけど

「じゃあ私も『悪戯』してみよっかな？」

あいつが笑い、そう言い切った瞬間に俺は後ろ二、三十メートルくらいにある扉に向けて走り始めた

「ほらほら、速く走らないと扉に入る前に捕まっちゃうよ？フッフ、
帰れなくなっちゃうよ？フッフ……どこへとは言わないけど、ね

」

扉をくぐれば帰れるよ

あいつは嬉しそうにそう言っていた。なら速く帰るために、早く逃
げるために。

『嬉しそうに』？

ってまさかッ！？

俺は確信を得て止まろうとした。しかしその時にはもう遅く、俺は
扉を勢いよく開け放ち、その奥に飛び込んでいた。しかし扉の奥に
床はなく、宙に投げ出された俺が最後に見たのは 『悪戯』 が
成功して輝かんばかりの太陽のような笑顔と

『もとのせかい』とまるっこい平仮名で書かれたプレートが
かかっている神の向こうにある扉だった…

「うん？確か今回は初めて騙されたんだっけ？」

真っ白の次は真っ暗か……いや、俺の姿が見えるから真っ暗じゃなくて真っ黒か……。どうでもいいな……。

「という訳で、よく来たわね、いらっしやい。」

「いや、まずここどこだよ……」

「あれ？見えない？じゃあ、」

そんな声と共に下手な指パッチンが響き周りが真っ白になった。そして辺りを見回してから俺は後ろに下がり、神から二十メートルくらい場所から、

タッタッタツ、

走り、

ダンッ！

思い切りジャンプし、

クルクル、

回転をつけてから姿勢をうまく調整し、

ズザッ！

土下座をした。

「帰して下さいお願いします」

「いや、今のそれ何よ……」

「は？ジャンピング土下座だろ？綺麗にやればたとえ神だろうと願いを聞かすにはいられないって……」

「えー…なにそれ……」

俺の前方二回転右方三回転土下座が通用しない！？

クソッ！高校では『悪戯』した奴ですら許してくれる究極の土下座として知れ渡っていたのに！？

「いや、知らないわよ、そんな事」

……仕事しないニートのくせに……

「失礼ね、私にだって仕事はあるわよ。　そうね、例えば死んでからこの『転生の間』に迷い込んだ魂を転生させたり……」

「おいおいおい、できない事はないんだろ？だったら　」

「無理無理、ここ輪廻から外れてるから　まあもと世界に無理矢理戻そうとしたら、うーん、多分良くて記憶がない状態で全く別人、悪いと世界の修正力で魂ごと消え去るわね」

できない事はないって何だったのさ

「それは…あれよ、今すぐアンタの魂をコピーしてもこの世界に送り付けた後、他の管理者に見つかる前に本物を私の世界に隠してみ

たり……」

「何だ？今さら人一人巻き込んで『ばれない反則は高等技術』とかぬかすのか？つーかあれか？つまり私にできない不正な事はない、と？」

「ええ」

スッパアアアアン！！

「~~~~~！！」

神が未だに持っていたハリセンで思い切り叩いたが、どうやら神も舌を嚙んだようだ。しかし、今はどうでもいい。

「胸張って言える事じゃねえから！大体何だよ、不正な事って！？普通にやれよ！？あんた神だろ！？」

罵倒、三時間経過

「まあ、こんなもんでいいだろ。おい、取り敢えずあんたは」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

あれ？目が濁ってるんだけど……

「つておい！？大丈夫か！？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんな……はっ！？私は何を……？」

「まあ取り敢えずそれはおいといて、なああんた、俺にはどんな選択肢が残されてるんだ？」

「そうね、転生か消えるかじゃない？」

考える素振りも見せず即答つて……それなら最初から言ってくれよ……

「それって選択肢がないって言わないか……？まあいいや、おい神、俺はあんたのせいで転せ「あゝはいはいテンプレテンプレ」まあいいや……それなら少しくらい特典とかくれんだろ？」

えっ？てめえテンプレが嫌いなんじゃねえのかって？

まあ確かに好きじゃないけどさ、少しくらい俺だって憧れるんだよ。だってさ、ほら　　ロマンがあるだろ？痛っ！やめっ！石投げないで！

「まあ私が殺したんだし……世界を壊さない程度ならいいわよ？」

つて範囲広ッ！？

まあいいや

「じゃあ俺がゲームやラノベで知った呪文を使えるようにしてくれ」

「えーと……ドラクエシリーズ、FFシリーズ、テイルズオブジアビス、fate/stay/night、とある魔術の禁書目録っ

て言ったところかしら?」

「まあそんなところか……俺って意外と結構少なかったんだな。まあメタルギアとモンハンにはまってたし……」

「で、他は?」

えっ?他?

まだもらえるのか……いや、ちょっと待った

「俺が行く世界はどんな世界何だ?」

「……考えてなかったわね。じゃ、ここから選んで?」

だからできない指パッチンをしようとするな、っておい!

「これ俺の部屋の本棚じゃねえか!」

指パッチンが鳴らなかったと思ったら俺の本棚が出てきた

「刀語、うみねこのなくところに、ひぐらしのなくところに、めだかボックス、NARUTO、ワンピース、バカとテストと召喚獣

」

改めて見るとジャンルに統一性が無さすぎて……

「うーん、じゃ、これで」

俺が取り出したのはIS インフィニット・ストラトス
何故かって?

金欠で六巻までしか買えなかった恨みを晴らしたいからだZ E

「そつだ、あと主人公とは違う歳にしてくれ」

「何で？せつかく原作を生で見れるのに。それに原作の知識があれば厄介事もなんとかできるんじゃない？」

「いや、二次創作のオリジナルの主人公を見ると……どんな状態でも主人公と関わる羽目になるだろ？だからせめて……な？」

けど違う歳ならIS乗れない限り大丈夫だろう？

乗れたとしてもISに触らなきゃいいんだ。興味は有るけど魔法や魔術のロマン溢れる生活には変えられない！

「あつ、そつだ。アンタの名前や性別は？今なら決めさせてやるけど？」

「いや名前は変えなくていい。親がくれたこの名前、結構気に入ってるんだ。もつとも、ありふれてはいるけどな。あと俺は男を好きになりたくはないからな。男で頼む。」

「オツケー、じゃあもういいかしら？」

「大丈夫だ、問題ない。」

……そろそろ足が痛い。立っただけとはいっても三時間以上はな……

「じゃあこっちのドアからね」

「わかった」

よし、こつから俺新しい人生の始まりだ！…少しだけ前の生活が心残りだけど、ネガティブになっても仕方ない。これから期待を寄せて生きて行こうぜ！！

「よしじゃあ出ば」

「ああと、手が滑ったwww」

パカッ

「って、うわあああああ！？」

地面が落とし穴とかそれなんてテンプ

「ごめんごめん、私『悪戯』が大っ好きになっちゃったみたいでさあ」

大声を上げて落ちている筈なのに、周りはやけにゆっくりに見え、その声ははっきりと、嫌な予感と共に聞こえた。

「特別サービス 原作にいつつぱい関わらせてあげるよ」

この

「クソ駄伸がアー！！！」

ドチャッ

「おお転生者よ、死んでしまつとは情けないwwwまあ、今回だけは生き返らせてあげるよwww」

一体誰が殺したと

一瞬で生き返つた俺の意識は再び闇に沈み

新しい、俺の人生が始まつた

「テンプレチート転生？フッフ、フハハハハハ！我が世の春が来t」うるキ

ハハハ、やっちまったZE

ありふれたテンプレを書こうと思っていたら指が勝手に動いたんだ

！何を言って（ry

こんな駄ぶ（中略）よろしくお願いいたします

はじめてのまほう〜達人編・これで君もネクロマンサーだ〜（前書き）

ちよつとだけ調子に乗りすぎました。

え？ちよつとじゃない？

……反省はしている。だが後悔は（ry

ネクロマンサーwww

一話で出した原作を知っていればわかってしまいますね。

反せ（ry

ではどーぞ。

はぢめてのまほう〜達人編・これで君もネクロマンサーだ〜

「キョウモイイテンキダナー」

誰だつて？ いや、俺だよ俺俺。 え？ いやいや詐欺じゃないよ？ 前に二回死んだ俺だよ。

にしても今まで大変だったわ〜、喋れるようになるまでずっと羞恥プレイだぜ？

一応生前？ 前世？ も二次創作とか好きで転生物とか読んで知ってたけど、やっぱりかなりキツイものがあるよね……
恥ずかしいからちよつと拒否すると

「大変よ！ 悠夜が食欲がないみたい！ どうしましょうあなた！」

「なんだつてー！？ じゃあまず病院か！？ それとも

」

うん、ここまで騒がれると罪悪感すらでて来るよね……

まあしっかり飲まないといけないのは知ってるんだけどさ。 はあ……

そんなこんなで喋れるようになってから（まあ二歳くらいだからだ）頑張って親とかがいない場所を、俺はついに作り出したんだ！！

そんな事をしてどうするのかって？

フツ、俺は今までロマンを求め、科学ではあり得ない現象を引き起こす事を望み、憧れていたのだよ。

俺したい事はただ一つ、それは

そう、憧れていた魔法・魔術の詠唱だ！！俺は今から憧れだった魔法を唱えるツ！！

ヒヤツツツホオオオオウ！！！

いやゝ頑張ったよ。知識もろくにないくせに親に見つからないように人払いのルーン（詠唱とかはなくて地味だけどこれも一応魔術の一つだな）を落書き帳に書いて家の周りに置いて来たんだ。

そして庭先に出て準備万端の今詠唱するお気に入りの一発は

『天光満るところに我はあり、黄泉の門開くところに汝あり、出でよ！神の雷！』

いや、この時点嫌な予感してたんだよ？だってこの秘奥義はアビスだったら一発の威力は最高だったと思うし。まあつまり

『インディグネーション!』

ドガアアアアアン!!!

山が半分、消滅しました……

いや、流石裏秘奥義、いい威力してんな

………違っよね。いい加減回想で引っ張るのやめようぜ、俺（作者）。

やべえ……危なかった……もし近くにやってたら俺死んでたんじゃね？

ってそれでもない!!

これが発端でもし俺が魔法を使えるなんて知られたら
!!

「ってあれ？体が………凄く………ダルいです………」

これは何だ？一気に強力な譜術を使用した反動か？

「待て、少しくらい後処理しないと……バレ……たら……」

急に襲って来た眠気を退けることも出来ず、俺はそのまま庭先を倒れるように寝てしまった。

「う……ん……？夢……だったか？まあいいや、テレビでも」

「今日の2時頃〇〇市で原因不明の雷による災害が起こりました。負傷者は奇跡的にいませんでしたが原因は専門家にもわからず、いまだに調査が難航しています。なおこの雷は〇〇市の小さな山の半分をさせており」

「プツン」

俺はテレビを見なかったことにして二度寝を始めた。

「おき おて にいさ」

「……ふあゝ、ん？何だ、何か用事か、妹よ」

「もうごはんだよ？にいさん」

何だもうそんな時間か。

確かあの悪夢のようなニュースが三時頃だったから……二度寝でそんなに寝るなんてあの譜術はどれだけの負荷があったのだろうか……まあ、今はもう倦怠感もなくなっているから大丈夫そうなんだけど。

ちなみに俺も妹も既に二歳だ。俺は双子の兄で、俺はともかく妹は喋れるようになってからそんなに経ってないと思うんだけど、偉くしっかり喋れているような　　こういうのって最初はたどたどしかつたりしないか？　　まあそれはただの偶然だろう、きつとウチの妹が賢かっただけだ、人物なんて関係な

「悠夜、千冬、早くしないとご飯冷めるわよ」

この世界は俺が嫌いなようだ……まあ仕方ないよね、あの神の世界だし……

このまま現実逃避をしてもしょうがないので説明すると、ISの世界の主人公、織斑一夏の姉の織斑千冬だ。俺はその双子の兄、つまりまんま主人公の兄貴なんだよ……。だとすればそんなにモブキャラから一線を画した重要人物にスポットライトが向けられないことがあるつか？いや、ない。

そして俺の無邪気なロマン溢れる魔法・魔術ライフのステージは幕を開ける前に核爆発で消し飛んだ……

え？普通に魔法使えばいいじゃんって？そんなことしたらばれた瞬間良くて『よし、その不思議な力を実験DA　世界のために犠牲になれ　人体実験END』か悪いと『あいつはきつと危ないやつだ　世界の危険をやっつける　正義の暗殺ミッションEND』が腹抱え

て大爆笑しながら待ってるだろう。
何せ原作では男でISを使える一夏に正面から『実験させてくれ』
と言うような世界だ。まして魔法だなんて言う未知の力なら誰もが
欲しがるか危険視するだろう。
それに俺は主人公の兄貴みたいだしひっそりと逃げて暮らすとか無
理な気がするし。

だから、俺はこのことを一生隠すことを決定した。

と、言ってもばれない程度には使うけどな。

「にいさん……いいかげんごはんたべようよ……」

ヤベっ忘れてた

1年後

今日から幼稚園に通うんだけど……

うん、あれ何だろうね……みんな自己紹介してるのに一人パソコン
弄ってね？誰かはわかるよ？どうせ『へんじがない。ただの天才の
ようだ』ってメッセージが出るだけで会話はできないと思うけど、
篠ノ之さん家の束さんでしょ？さすがになんとなくわかるよ……

うん、けど幼稚園児がウィンドウを何個も出して高速でタイプしつ

つ、名前だけ簡潔に言っで自己紹介っでどうよ？
結構シニールだぜ……？

「おりむらちふゆです。すきなものはかぞくです。みんなとなかくしたいです。」

ほら、千冬も可愛い自己紹介をしてるじゃないか。もうちょい園児らしい自己紹介でいいのかね、あのみんなのアイドル東さんはもしかしてあれ？固有スキル『他人嫌い』ってもう発動してるの？早すぎねえ？他人に見切りつけんの。何があつたのかは知らないけどこんなに早かつたら千冬だつてまともに会話できないんじゃないや

「ちーーちや~~~~ん!!!!!!」

すいません俺が気づいてないだけでかなり親密だったようです。

千冬を知らないから無視してんじゃなくて、千冬に気づいてなかっただけか。

あ、先生、これは止めようとしたら

「あの、東ちゃん？今はみんなが自己紹介してるから
「うるさいな、今東さんはちーちゃんと話してるんだよ？見てわからないの？わかつたらじゃまだからあっち行つて」

あーあ、言わんこっちゃない。こんな空気じゃ滅茶苦茶自己紹介しづらいんだが…

他の園児ならきつと空気なんざ読めなくてそのままいけるんだろうが……

ええい、ままよ！

「千冬の兄の織斑悠夜だ。これから一年よろしく頼む。」

ふう、これでなんとか先生も持ち直すだろう。あとは……

じーーーーっ

この張り付くような世紀の大天才東さんからの視線をなんとかできればなあ……

「ねえ、ちーちゃんのお兄さんなんだよね？君は頭いいの？」

自由時間になったらすぐこれかよ。パソコン見ながら言われても、なんて言うか、対応に困る。

「確かに俺は千冬の兄だが。お前は篠ノ之だったか？篠ノ之、人と話すときは人の目を見て話せ。それが最低限の礼儀ってもんだ。それができないようなやつとは話したくはないな。」

「ふーん。じゃ、話して」

俺に向けられたのはまるでものを見るかのような冷たい瞳だった。

俺は千冬の付属品として視界には入っているけどまだ興味はないっ

てところか……

「そうだな、確かに姿勢を正してくれたなら答えない訳にはいかないな。けど生憎質問には答えられないよ」

「どうして？」

どうしてってそりゃあ

「頭の良し悪しは自分じゃなくて他人の評価で決まるんだ。だから俺には答えられない。それに俺は自分が頭いいなんて思えるような過剰な自信も持ち合わせていないからな」

自分で『俺超頭いい』なんて言うやつは変人と紙一重は天才か馬鹿だけだろう。あいにく俺は性格が普通から逸脱してとは思わないからな。

って言ってもこんな会話してたら、

「ふーん。じゃ君は頭がいいんだね。」

「どうして？」

「だって根拠を持ってしっかりと話せる園児って頭いいと思わない？」

頭がいいように見えるよね……

「で？俺の頭がいいとどうなの？」

篠ノ之はさっきより少しだけ興味もったような瞳でこちらを見てくる。けどその瞳には諦めのような色が浮かんでいる気がする。一体どうし

「ねえ、君はこれを見て何かわかる？」そう言って篠ノ之は俺にパソコンの画面を向けた

その画面に映っていたのは幼稚園児にはあまりに難解な数式と正確な理論、詳しすぎる設計図の数々で そして俺は篠ノ之が俺に向けた瞳の意味を理解した。

ああ、結局この子も同じなんだ、前世の俺と。ただ寂しかっただけなのか。理解してくれる友達がなくて。

だったら俺がする事はひとつしかない。

「何だ、この式間違ってるじゃん」

そう、俺はごく普通の会話をするように間違いを指摘し、篠ノ之に

心の中で共感した。

俺も前は世界に、他人に見切りをつけ、勝手に絶望していた。

前の俺は独りだった。

……いや、独りだと『思い込んで』いた。

同年のみんなは俺が言うことを誰も理解してくれず、親でさえそうだった。

理解してくれる人がおらず、独りなのだと思い込んでいた。

けど、実際は違った。

何時も誰かが遊ぼう、と誘ってくれていたし、みんながしてるような、未だに舌つたらずな会話に混じっていれば楽しいかった。

なのに、無理やりみんなに理解できない会話をさせようとして、その上勝手に一人ぼっちを気取って困らせていたのは俺の方だった。

そんな簡単なことに気づけなかった俺は気づいた時、みんなに申し訳なく思い、そんなことに気づけなかった『馬鹿』な自分のことが悔しかった。

だから、だから俺は篠ノ之にあんな寂しい時を過ごして欲しくないと思った。俺のように間違えて、後悔して欲しくないと思った。

俺が『頭がいい』と思ったのだろう篠ノ之は今度こそ嬉しそうな、
本当に楽しそうな笑顔を きつと初めての理解者であったのだ
ろう 俺に向けていた。

「 なあ篠ノ之。

お前はこれやっていて楽しいのか？お前は知らないだけかも知れ
ないけど、他のやつと馬鹿みたいなこととして遊んだり、馬鹿みたい
な話しをするのも意外と楽しいんだぜ？だから 」

篠ノ之に言葉を挟ませないようにと一息で言い切った俺は『こいつ
何言ってるんだ？』というような顔をした篠ノ之に

「 つてあれ？ちよつと待った。

『こいつ何言ってるんだ？』というような顔をした？

「えつと 篠ノ之。今お前の周りにはあんまお前についていけ
るやつがないよな？お前、この状況をどう思う？」

「どつってそれは

ちーちゃんとゆーくんがいるんだもん、最高に楽しみに決ま
ってんじゃない」

篠ノ之……そんな無理やりな我慢なんて

うん、してないよね。これ単なる人嫌いだ。だってめちゃくちゃい
い笑顔だもん。
全然寂しさの裏返しとかじゃないわ。

うわ……クソ恥ずかしいんだけど……何俺偉そうに説教じみ
たことしてんの？ イッタイわ……
ハア……

「どしたの？ ゆーくん」

「すまん篠ノ之……俺は（盛大な自爆で）立ち直れそうにないから
千冬と遊んでいてくれ……あとゆーくんって何だ……」

「？ よくわからないけどゆーくんはゆーくんだよ？ じゃあ束さんは
ちーちゃんと遊んで来るね」

ちなみに千冬は持ち前のカリスマを駆使して他の園児を先生以上にまとめる。

あ、先生がいじけてる。

でも大丈夫ですよ先生。 たった今篠ノ之が千冬のところに行ったから…… ほら、篠ノ之が千冬に猛アタックして他のやつを蹴散らした。

出番ですよ、先生。

先生としてはよくない気がするがなんか蹴散らされた園児を見た瞬間凄い笑顔になったぞ……

そんなこんなで俺の二回目の幼稚園生活（先行き不安）が幕を開けた。

はじめてのまほう〜達人編・これで君もネクロマンサーだ〜（後書き）

ゆーくんは思い込みの激しいイタイ子www

はん（ry

主人公はドラクエで言うかしこさが最大値の2乗くらいあるので威力が半端ない感じになりました。

威力を調整する修行とかする予定です。

気絶はただの魔力不足。

多分そこら辺も修行します。

携帯で打つのも疲れます。

ただ空いた時間に打ってるだけですからパソコンでできないんですよ。

……まあタイピングも遅いんですけど。

そんな訳で次回予告（笑）

長かった『あの』時間にとつとつ終止符が打たれる……

次回、『幼稚園卒業。そして伝説（笑）へ』

え？意味がわからない？

は（ry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4393ba/>

I S Insincere・story ～ふざけたオリ主の転生録～

2012年1月13日20時48分発行